

卒業してから、はや20年に迫る。だが、その記憶が薄れることはない。

FIGHERSに在籍した4年間で振り返りつつ、その経験が現在の自分に、いかに活かされているかを記したいと思う。

FIGHERSとの出会い

91年秋、関京戦。浪人中の私は、京大志望の友人と、3塁側の緑の観衆の中にいた。ルールもよく理解せぬまま緑を応援しながらも、対岸のブルー、#98の選手の足から放たれる途方もなく滞空時間の長いキックの軌道に目を奪われていた。

入部

国立大学進学を目標とするも叶わず、関学の門をくぐった。秋に見たブルーの鮮烈な印象は消えることはなく、FIGHERSでこの力を試す事を決意した。あの時釘付けとなった#98のK/P中筋さんの背中を見て過ごした1年目。その偉大さと、責任の重大さはすぐに理解できたもの。翌年卒業するまでにその域に達する事は一つで、さすがに終わった。

93年シーズン

中筋さん卒業後、ただスライド式においてきた正キッカーの座。本来FIGHERSのポジションは、そんな形で得られるものではない。底ない。

その年の戦力は充実しており、優勝候補の筆頭にあげられていた。その中でフットボールの理解も覚束ない自分みたいな者がスタートメンバーに名を連ねて良いのか。何の実績も、実力の保証もない自分が試合に出てやっつけていけるのか。自分はチームの信頼を得ているのだろうか。自分の一蹴りが一年間のチームの努力を台無しにするかもしれない。ネガティブな事ばかり浮かんで、重圧で押しつぶされそうになる。そんなシーズンのスタートだった。

結論から言えば、チームは甲子園ボウルを制覇し学生日本一となった。個人的にも2度終了間際の逆転FGを決めることができた。少しはチームに貢献できたのではないかと、少しはしかし、これは全て4年生のおかげであった。

聡 城台

SATOSHI JODAI
空の翼が輝くとき

キッカーという仕事

「心」「技」「体」。どのポジションでも、この3つのバランスが重要だが、私は特に「心」の占める比重が大きいと考えた。誰もに必ず訪れる勝負を決する場面。その場面でいかに平常心でいられるかが成否を分ける。

そこできっちり仕事を果たすこと。それがキッカーの存在意義だと思っていた。

普段の練習は、ひたすら数をこなせば良いというわけではない。テクニカルなものは一度習得すれば特にそれ以上必要なものではない。

「平常心」を保て、と言われるが、「平常心」



「お前がミスしたとしても、それは全てうまく仕事させられなかった4年のミスや。お前はチームの代表として胸張って、自分のプレーを楽しんでたらええねん。」

チームの足を引っ張ることを恐れるあまり、自信を持って縮こまっていた自分にとっ、まさに年が備えるべきメンタリティーの意味を、この時本当の意味で理解させてもらおうと共に、「自分でいいのから、俺しかいないなら俺がやる」「俺も4年生と同じ気持ちで戦う。」と主体的、前向きに取り組みもうと意識の転換を図らせてもらった。

社会人として

この代の4年生は精神面においても日本一に値する先輩方であった。

私は現在、航空会社で航空機の運航に携わっている。何事もないように出発をして、安全に、何事もないように到着する。

だが、実際には何事も無いフライトなど無い。安全を阻害する要素は至る所に存在している。人的、機械的、システムのトラブル、厳しい自然現象との遭遇、などが突発的に襲い来る中、事前に準備した対処法により、適確に判断し手当する。一秒の判断の遅れが取り返しつかない

い事故に直結する場面は常に存在する。ただ、それらは事前の綿密な準備とイメージトレーニングがあれば落ちついて対処できるのだ。我々操縦士はトラブルに対処する為にいるのだから。仕事に取り組み上で根底に流れるものは、まさにFIGHERSで経験してきた事と変わらない。どんな状況に置かれても、それが当たり前のことを当たり前にこなす、チームの勝利に貢献する。チームとしてのパフォーマンスを最大限引き出せるよう、共通の認識を持って互いに要求しあう。この事はどんな組織においても通じている。

我々の仕事を白鳥に例える人がいた。白鳥は涼しい顔で悠々と水面を進むが、水面下では足を懸命にバタつかせている。風のなか、空で翼を輝かせる為、我々は地上で泥臭くただひたすらに安全を追求するのである。

常勝(と思われている)FIGHERSが、(一見)スマートに勝利し続ける為に必要な事と全く同じだと思う。

自分が4年の時には先輩が示してくれたメンタリティーを具現化することができなかった。今もその悔いは心の深いところにこびりついて剥がすことはできない。しかし、だからこそ、社会というフィールドにおいてはFIGHERSで求め続けた理想形を体現する余地があると信じて今も頑張れるのだと思う。

業務中、常に目につく場所に新月のロゴを貼ったフライトバッグを配置する。ブルーのユニフォームを着ていたあの頃の気持ちを抱き、いつかこの月が特大のスパーマンとなる日を夢見つつ、今日も平常心で、何事もなく「空の翼」が輝けるよう尽力している。



城台聡(じょうだい さとし) / 1991年大阪府立大手前高校卒業、1992年関西学院大学入学。アメリカンフットボール部在籍時はK/Pを務める。1996年関西学院大学法学部法律学科卒業。日本航空入社。カリフォルニア州ナバに単発プロペラ機から実機訓練開始。4年間の訓練期間を経て、2000年747-400型機にて乗務開始。その後、ボーイング777型機に移行。国内線・国際線を担当する。

4年生の言葉

前述の不安と重圧からいかに解き放たれたのか。それは4年生の言葉があったから。

などというものは、保とうとして簡単に保てるものではないため、逆にラスト数秒といった極度に追い込まれた場面をリアルにイメージし、心拍数を最大限上げた状態を作り出したうえで、普段通りのタイミング、普段通りのフォームを保てるか、の確認に時間を費やした。それが練習でできていれば、実際の場面では既に経験済みの体験として、平常心に近い状態でいられるのだ。